

だいこんらん 大混乱

スペインの内戦時、小都市ゲルニカが爆撃を受けた直後に、ピカソは全世界に向けてこのメッセージを巨大なキャンバスに描き出しました。

色を付けず、白と黒だけで表現したのは、血も涙もないむごい仕打ちを伝えるためでした。死んだ子を抱いて泣き叫ぶ女性、炎にまかれて絶叫する人々、大混乱、うめき声、苦痛に歪んだ顔。画面の手前で横たわる、こっぴみじんになった兵士がわかりますか。

■探してみましよう

■このディテールも探してみて

ランプ2個

折れた剣

赤ん坊

炎

12の手

花

ハト

蹄6つ



ひろしげ おも えが 広重が思い描いたロンドン

ここは日本……といたいところですが、この絵のタイトルにも書いてあるように、これはロンドンの港。実のところ、この浮世絵師はロンドンに行ったことなど一度もありません。広重は、多くの資料や情報だけで異国の地のイメージを膨らませ、みごとにこの場面を洗練されたものに仕上げました。でも、ちょっとユニークなところがありますよ。橋の赤い手すりは、その当時日本で流行っていたデザインで、海に浮かぶのはジャンクと呼ばれる中国の帆船なのですから。



■探してみよう

- ぼうえんきょう なが おとこ
望遠鏡で眺める男
- ぐんたい ぎょうれつ
軍隊の行列
- うま とう
馬4頭
- こぶね そう
小舟8艘
- ばくはつ けむり
爆発の煙
- こ りょうしん
子どもとその両親
- きょうかい
教会
- シルクハットをかぶった男

■このディテールも探してみよう



にぎやかな^{ちゅうしょく}昼食

セーヌ川沿いにあるレストランのテラスで、ルノワールは、友人たちに長い時間ポーズをとってもらってこの絵を描きました。それにしても、実際にこんな場面があったんじゃないかと思えるほど自然に描かれていますね。食事が終わりに近づいた雰囲気、風にそよぐ木の葉やきらめく水面。白いテーブルクロスと、透き通ったグラスに揺らめくあたたかな光。ササッと筆を走らせて、一瞬のうちに描き上げてしまったように見えます。

ところで、左の端に座ってる若い女性、誰かわかりますか？ 彼女の名前はアリーヌ・シャリゴ。ルノワールのお気に入りのモデルで、この数年後に彼の奥さんになった人なのです。

■探してみましょう

- 黒ぶどう 2房
- 耳をおさえるご婦人
- 小さな樽
- 花飾りのついた帽子 2つ
- ひげを生やした 7人の男
- グラス 11個
- 犬
- 帆を張ったヨット 2艘
- 瓶 6本

■このディテールも探してみよう

